

生涯活躍を推進する通いの場

自走する「自分たちの通いの場」の
実現に向けて

通いの場に参加するひとりひとりが主役となり、
持続可能で活気ある通いの場を創る

かわにし通いの場EXPO

目的

(1)共有

通いの場を運営されている方々が、普段の活動の中の喜びやエピソードを共有する場、また、新たに行いたい活動等へのアドバイスやアイデアを持ち帰り、活動の発展につなげる共有の場とする

(2)継続

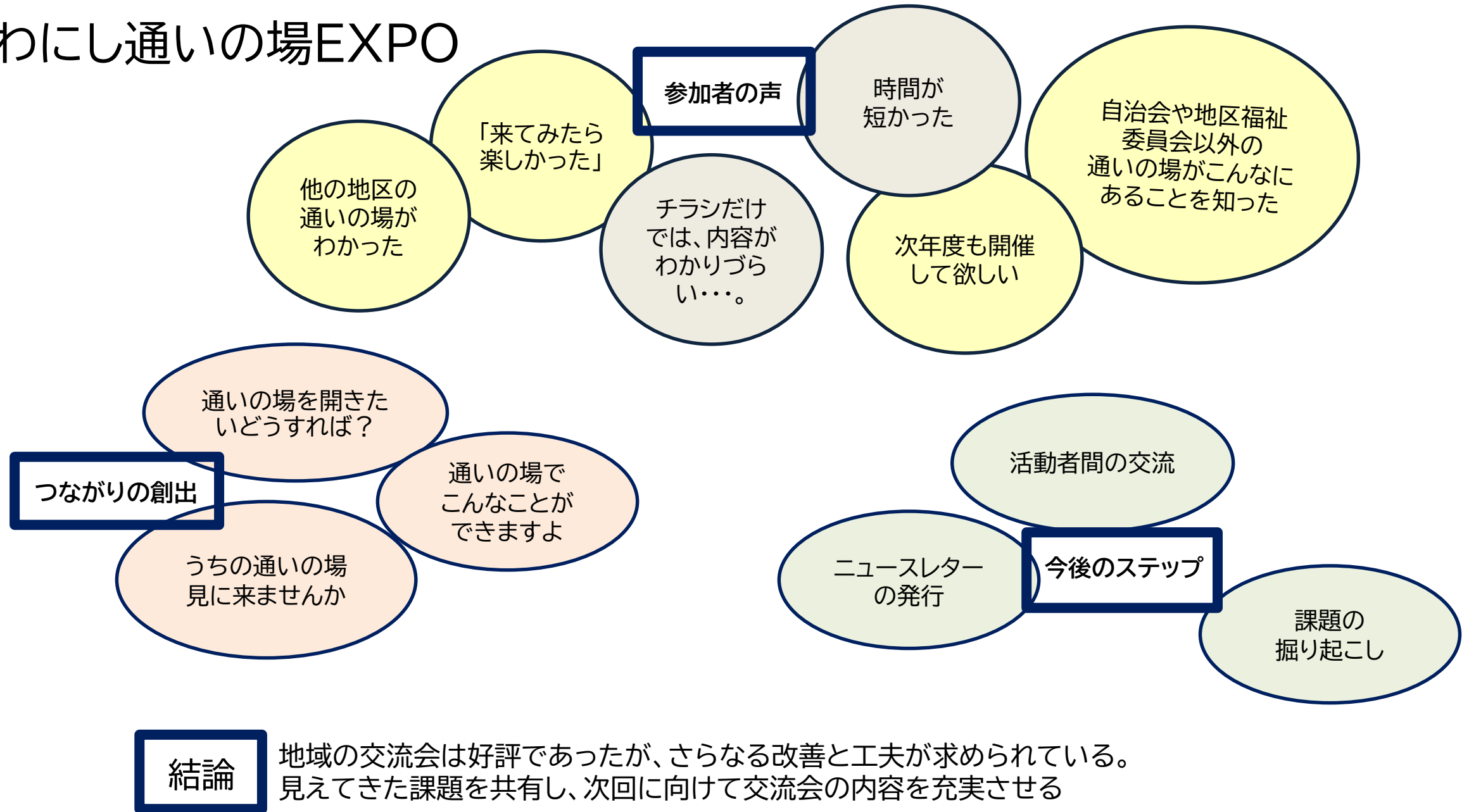
通いの場に集う意義や効果を共有し、いかに参加者を含む活動者を増やしていくか、活動を継続するためには何が必要かを考えるための場とする

(3)連携

活動主体を超えて多様な通いの場を知り、団体間が連絡を取り合う関係性を作る連携の場とする
※交流を重ねることで、活動の継続と発展、新しい活動の創出をめざす



かわにし通いの場EXPO



見えてきた課題「通いの場」が直面する2つの構造的課題

課題1. 支援者の「負担感」と担い手不足

一部の支援者が準備や運営の「おもてなし」を一身に引き受けることで、疲弊や負担感が増大しています。これが新たな担い手不足を招く悪循環となっています。

課題2. 参加者の固定化

もてなされるだけの立場で参加し続けると、役割がなく通いの場への当事者意識が低下します。結果として参加メンバーの固定化や活気の低下に繋がります。

めざす「通いの場」の未来 全員が「主役」の通いの場

～支える・支えられるをこえて、みんなでつくる通いの場へ～

誰もが役割をもち、居場所がある社会へ

参加者が「役割」と「やりがい」をもつ通いの場は、介護予防のみならず、地域における最強の緩やかな見守りネットワークとなります。

支援者は「黒子(サポーター)」となり、住民全員が「当事者(オーナー)」となる。この誇りと愛着のある自立した場こそが、持続可能な未来への扉を開きます。

まず、意識改革から

おもてなしから、お互い様へ

支援者が完璧なサービスを提供するのではなく、参加者に「役割」を渡すことで、参加者自身が主役としてのやりがいや誇りを見出すことができます。

自走化(住民主体運営)への3ステップ



1. 参加者も役割を担える 通いの場

鍵開け、お茶の準備、受付、体操の挨拶など、
誰でもできる「小さな役割」を全員に切り分け、
全員で場を創る当事者意識を醸成します。



2. 自走できる通いの場(担 い手・資金)

自分たちの場を守るために、適正な会費の
設定や多様な主体との連携など、自走をめ
ざします。



3. 行政の関係する会館以外 での通いの場 (自宅や空き家など)

多様な形の多様な通いの場が、柔軟な視点で
広がるよう提案します。

※男性の参加や、通うことが難しい方が自宅で通いの場を開催するなど多様な提案を行い、
支える・支えられるをこえて、みんなでつくる通いの場をめざします。